

## 第3章 状態とオペレータ

### 3.1 基底状態の正規直交性と完備性

$$\text{正規直交性} \quad \langle j | k \rangle = \delta_{jk}$$

$$\text{完備性} \quad |\psi\rangle = \sum_{\text{all } j} |j\rangle \langle j | \psi \rangle$$

を満たす状態の組を基底状態という。

偏光系では  $|x\rangle, |y\rangle$  は基底状態。他の基底状態の組も存在する。例えば偏光系で

$$\frac{1}{\sqrt{2}}(|x\rangle + |y\rangle), \quad \frac{1}{\sqrt{2}}(|x\rangle - |y\rangle)$$

は別の基底状態の組を構成する。

### 3.2 偏光系

任意の偏光はニコルのプリズムによって  $|x\rangle, |y\rangle$  の二状態に分離できる。

逆に、どんな偏光状態も  $\{|x\rangle, |y\rangle\}$  のような基底状態の組で実現することができる。例えば

$$|\theta\rangle = \cos\theta |x\rangle + \sin\theta |y\rangle$$

$$|45^\circ\rangle = \frac{1}{\sqrt{2}}(|x\rangle + |y\rangle)$$

$$|-45^\circ\rangle = \frac{1}{\sqrt{2}}(|x\rangle - |y\rangle)$$

$$|R\rangle = \frac{1}{\sqrt{2}}(|x\rangle + i|y\rangle) \quad (\text{右旋光})$$

$$|L\rangle = \frac{1}{\sqrt{2}}(|x\rangle - i|y\rangle) \quad (\text{左旋光})$$

ちなみに、 $\{|45^\circ\rangle, |-45^\circ\rangle\}$ 、 $\{|R\rangle, |L\rangle\}$  はそれぞれ別の基底状態の組を構成する。

### 3.3 スピン 1/2 系

スピン 1/2 粒子、例えば電子は不均質磁場  $B_z$  により  $|+z\rangle, |-z\rangle$  の二状態に分離できる。

$\{|+z\rangle, |-z\rangle\}$  は基底状態で、スピン 1/2 電子のどんな状態もこの組み合わせで実現できる。例えば

$$|+x\rangle = \frac{1}{\sqrt{2}}(|+z\rangle + |-z\rangle)$$

$$\begin{aligned}
|-x\rangle &= \frac{1}{\sqrt{2}}(|+z\rangle - |-z\rangle) \\
|+y\rangle &= \frac{1}{\sqrt{2}}(|+z\rangle + i|-z\rangle) \\
|-y\rangle &= \frac{1}{\sqrt{2}}(|+z\rangle - i|-z\rangle)
\end{aligned}$$

ちなみに、 $\{|+x\rangle, |-x\rangle\}$ 、 $\{|+y\rangle, |-y\rangle\}$  はそれぞれ別の基底状態の組を構成する。

### 3.4 一次元空間中の粒子

スピンなどの内部状態を考慮しないですむ粒子は、全空間を  $\Delta x, \Delta y, \Delta z$  で切り刻んで、その存在位置  $\{|x_j, y_k, z_l\rangle\}$  を基底状態とできる。

一次元では  $x_j \sim x_j + \Delta x$  の領域に存在する状態  $\{|x_j\rangle\}$  が基底状態になる。

ただし、空間のサイズが  $L = N\Delta x$  として  $-L/2 \sim L/2$  に限られており、かつ周期的境界条件を仮定すると、議論は楽になる。

明らかに

$$\langle x_j | x_k \rangle = \delta_{jk}$$

で、

$$|\psi\rangle = \sum_{\text{all } j} |x_j\rangle \langle x_j | \psi \rangle$$

となる。

### 3.5 運動量基底状態

周期型境界条件を有する一次元空間の別の状態として、次の運動量確定状態が存在する。

$$\langle x_j | p_J \rangle = \frac{1}{\sqrt{N}} \exp\left(i \frac{p_J x_j}{\hbar}\right)$$

ただし  $p_J$  は、 $J$  を  $-(N-1)/2 \leq J \leq (N-1)/2$  なる整数として、 $p_J = (2\pi\hbar/L)J$  である。この運動量確定状態は別の基底状態の組を構成する。

### 3.6 一次元空間の連続化

$\Delta x \rightarrow 0$  とすると、空間が連続化される。この場合、確率  $P(x_j \sim x_j + \Delta x)$  よりも確率振幅  $p(x_j) = P(x_j \sim x_j + \Delta x)/\Delta x$  の方が利用される。

それに合せ、確率振幅も密度型のものを定義する (確率密度振幅)

$$\langle x | x' \rangle = \delta_{xx'} / \Delta x \quad (\text{正規直交性})$$

この右辺は  $\Delta x \rightarrow 0$  で Dirac  $\delta$  関数  $\delta(x - x')$  となる。

$$\psi = \sum \Delta x |x\rangle \langle x | \psi \rangle \quad (\text{完備性})$$

$\sum \Delta x$  は  $\Delta x \rightarrow 0$  で  $\int dx$  となる。また、 $\langle x | \psi \rangle$  は波動関数  $\psi(x)$  とも呼ばれる。

### 3.7 オペレータ

操作や装置のように量子状態を変えるものは、オペレータによって表現可能である (実は線形性を仮定)。

$$\hat{A}|\psi\rangle = |\phi\rangle$$

オペレータも基底状態展開ができる。 $\hat{A}$  がスカラー量でないことを示すため、必要に応じ付ける。

$$\langle j|\hat{A}|k\rangle \langle k|\psi\rangle = \langle k|\phi\rangle$$

[例]  $x$  偏光板

$$(x \text{ 偏光板})|x\rangle = |x\rangle, \quad (x \text{ 偏光板})|y\rangle = 0$$

これより

$$(x \text{ 偏光板})|\psi\rangle = (x \text{ 偏光板})|x\rangle \langle x|\psi\rangle + (x \text{ 偏光板})|y\rangle \langle y|\psi\rangle = |x\rangle \langle x|\psi\rangle$$

### 3.8 単位オペレータ

何も状態を変えない素通しの装置は単位オペレータ  $\hat{I}$  と呼ばれる。

$$\hat{I}|\psi\rangle = |\psi\rangle$$

$$\langle j|\hat{I}|k\rangle = \langle j|k\rangle = \delta_{jk}$$

以上より、完備性の式に対し、形式論であるが次式が成立する。

$$\sum_{\text{all } j} |j\rangle \langle j| = \hat{I} \quad (\text{完備性})$$

この式を随所に入れることにより、展開式が簡単に得られる。